

新井 隆（一橋大学大学院社会学研究科）

## 1. はじめに一歴史的背景

グアムを含むマリアナ諸島は、17世紀半ばから約350年にもわたって、スペイン・ドイツ・アメリカ・日本といった大国から植民地支配や戦争の舞台にされてきた歴史がある。1898年の米西戦争の結果、マリアナ諸島は二分され、ロタ以北の北マリアナはドイツ領に、グアムはアメリカ領となった。さらに、1914年に勃発した第一次世界大戦は太平洋島嶼地域にも影響を及ぼし、北マリアナを含む旧ドイツ領太平洋諸島は日本の支配下に置かれ、国際連盟のC式委任統治領として日本がその影響力を強めていくことになる。20世紀前半には、マリアナ諸島は日米が戦略的にせめぎ合う舞台になっていったといえる。アジア・太平洋戦争においては、1941年12月8日から二日間に及ぶ日本海軍航空隊による空襲の後、10日に南海支隊（支隊長：堀井富太郎少将）を中心とする陸海軍部隊がグアムに上陸し、同日中に同島の占領を布告した。それまで約40年にわたりアメリカの支配下に置かれていた同島は、日本による厳しい占領統治にさらされることになった。特にその末期、アメリカ軍の再上陸が間近に迫ると、男性は飛行場建設や陣地構築に駆り出され、女性や子どもは食糧増産に動員された（Sanchez 1988:187, 215-217; Carano & Sanchez 1964: 274, 287-289）。さらに、日本軍はチャモロの利敵行為に神経を尖らせ、警戒するようになっていった。そうした状況下で、日本軍による拷問や虐殺、レイプが多発するようになり、グアムのチャモロにとっては、トラウマになるような恐ろしい体験を強いられたといえる。44年7月21日には、米軍がグアムに再上陸し、数週間にわたり日本軍と激戦を繰り広げた後、同年8月11日に同島を奪還した。

日本軍からグアムを奪還した米軍は同島の軍事化を推し進め、戦後間もなくの時期には米軍用地として島全体の半分以上が接収されるほどであった（Sanchez 1988: 252）。1950年にグアム組織法が制定されると、同島には文民政府が置かれ、島に暮らしていた人々にはアメリカ市民権が付与されることになった。この組織法によりグアムは「非編入領土」（unincorporated territory）という政治的地位の位置づけがなされることとなり、現在に至っている。

加えて、1960年代ははじめから半ばにかけてグアムの入島制限が解除され、日本の海外渡航が自由化されると、日本から多くの観光業者がグアムに進出するようになった。70年代以降になると、日本からグアムへの観光客が増え始め、97年には年間111万人の訪島者を記録している（山口 2007:116-119）。現在のグアムは、観光と基地が島の経済を支える主要産業となっており、前者は日本に、後者はアメリカにそれぞれ大きく依存するようなかたちになっている。

## 2. 問題関心

グアムでは毎年7月になると、日本による占領統治や日米両軍の激戦の中で惨禍を被ったり、亡くなったりしたチャモロの追悼式が島内各地で行われている。特に、7月21日は米軍が日本の占領統治からグアムを「解放」したことを記念して、「解放」記念日(Liberation Day)という祝日が設けられている。

つまり、同島の人々にとって毎年7月は、約70年前の日米による戦争で受けた苦難を想起し、犠牲者を悼むための大事な1ヶ月であるということができる。これらの追悼式では、地元のコミュニティや記念を目的とする財団などが中心となり式典を主催しており、グアム政府・議会関係者、米軍関係者、在グアム日本総領事、そして日本による占領統治を生き抜いたサバイバーたちなど様々な人々が足を運んでいる。また、アフターセッションで懇談を持つなど参加者同士の交流を深める場として機能している点も注目される。

さらに、近年、在グアム日本人の中からアジア・太平洋戦争中に同島で戦没した日本軍将兵に向けた慰霊祭を行うグループも現れている。戦後、日本政府による遺骨収集団や慰霊団が数十回にわたりグアムを訪れているが、在グアム日本人有志たちによる遺骨収集・慰霊活動にも目を向けてみる必要がある。現地のコミュニティや記念財団等が主催する追悼式(memorial services)とは別のかたちで行われる戦没者追悼・慰霊の空間では、どのような「戦争の記憶」が想起されるのだろうか。

グアムでは、このようにアジア・太平洋戦争で犠牲になった現地のチャモロや日米両軍の将兵に対する追悼式・慰霊祭(memorial services)が毎年のように行われている。しかし、一つ一つの追悼式・慰霊祭を見ていくと、それぞれの式典には成立の時期や内容に違いが見られ、必ずしも同じ様相を呈しているとはいえない。各式典への参加者や主催者の中身、式典の形式等に目を向けてみると、グアムにおけるアジア・太平洋戦争の記憶が想起される場として、これらの式典が持つ「複雑さ」が垣間見えてくる。また、戦争が惹き起こす「被害」をめぐる社会的承認の問題と戦後グアムの社会状況を照らし合わせてみると、同島における戦争の記憶は、それに触れる者にとって時として「危うい」ものであるということができる。「想起」という行為における何気ないやり取りが不意に過去の「苦難」を呼び覚ます危険もありうるのである。

本稿では、マリアナ諸島における植民地支配という歴史的背景を踏まえつつ、グアムにおけるアジア・太平洋戦争の記憶の表象に焦点を絞る。具体的には、毎年7月にグアムで行われている様々な追悼式・慰霊祭を取り上げ、同島における戦争の記憶をめぐる相克をグアム・日本・アメリカという三者の視点を軸にしながら考えていく。その中で、追悼・慰霊の場における戦争の記憶をめぐる「複雑さ」についても言及したい。

## 3. 「想起の場」としての追悼式・慰霊祭

### (1) 戦争を生き抜いたサバイバーの追悼行事への参加

グアムで毎年7月に行われる追悼・慰霊の諸活動は、主に戦争の惨禍を被ったチャモロ

の人々に向けられるものが多いが、戦死した日米の将兵を悼むためのものもある。ここでは、激しい戦闘や虐殺・強制収容の現場となった場所と追悼式・慰霊祭との関わりにも注目しながら、具体例を見ていきたい。

まず、日本による占領統治やその後の日米戦で犠牲になったチャモロに対する追悼式は島内各地に分かれて行われている。こうした追悼式への参加者に目を向ける時、忘れてはならないのが戦争を実際に生き抜いたサバイバーの存在である。彼ら／彼女らは、自らが生き抜いた戦争の惨禍について追悼式の中で参加者に向けて語ったり、自分の子どもや孫とともに式典に参加したりしている<sup>1)</sup>。特に、子や孫を連れての追悼式への参加というのは、サバイバーの経験を「伝えていくこと」の意味を考える上でも興味深い。サバイバー側からだけでなく、子どもや孫の方からも積極的に追悼行事に参加していこうとする姿勢が見られ<sup>2)</sup>、グアムにおける戦争体験・戦争の記憶が世代を越えて、双方向的に活性化されているといえる。もちろん、追悼式には他にも様々な参加者が見られるが、個々の体験や記憶が「共有」「継承」されていくための場づくりがなされているのである。加えて、彼ら／彼女らの語りによく見られる表現として、「赦すけれども、忘れない<sup>3)</sup>」というものがある。最後まで触れるが、この表現はグアムにおける戦争の記憶の表象を考える際には避けて通れない。

## (2) 追悼行事に対する米軍の関わり

また、もう一つ見逃すことができないのが、チャモロの追悼行事に対する米軍の関わり方である。これらの追悼行事の中には米軍基地・軍用地の近くやその敷地内で行われるものがある。グアム北部チャグイアン (Chagui'an) での追悼式は、米空軍基地のすぐ近くで行われており、式典には多くの米軍関係者・Guam National Guardの姿が見られる (【写真1】参照)。軍関係者の追悼行事への参加は、チャグイアンに限ったことではないが、同島におけるチャモロの犠牲者の想起と米軍の存在が強く結びつけられていることがわかる。

【写真1】では、米空軍の高官と思しき人物とグアム議会議員が固く握手をしており、手前には他の軍関係者の姿も見る事ができる。軍関係者の追悼行事への参加は、後にも述べるような星条旗を模したデコレーション等とも相俟ってグアムとアメリカの結びつきの強さをより象徴的に表現する構図を生み出しているといえるだろう。

さらに、グアム南西部のフェナ (Fena) で行われた虐殺に関する現場訪問・追悼式にも同様に米軍の影響が顕著に見られる。フェナ虐殺の追悼行事は現場とされている洞穴が米海軍の弾薬貯蔵施設内にあるため、毎年7月の追悼行事の時のみ特別に中に入れるようになっている。虐殺現場への訪問に際しては、米軍関係者の同行・敷地内への誘導があり、

1) *Pacific Daily News*, July 17, 2007, p. 3.; *Ibid.*, July 16, 2008, p. 2.; *Ibid.*, July 11, 2010, p. 3.

2) *Ibid.*

3) サバイバーやその家族などによる「赦す」や「忘れない」といった表現は、追悼式等の新聞報道でも散見される。( *Pacific Daily News*, July 17, 2007, p. 3.; *Ibid.*, July 16, 2008, p. 2.; *Ibid.*, July 11, 2010, p. 3.; *Ibid.*, July 25, 2010, p. 15.; *Ibid.*, July 22, 2011, p. 3.)

洞穴へと続く小道にも軍関係者が並んでいる（【写真 2】参照）。米軍が存在していることで、虐殺されたチャモロを想起するという活動が妨げられているともいえるのだが、表向きには目立った不満の声は上がっていない。

【写真 1】 チャグイアン追悼式の参加者たち



(2011年7月：筆者撮影)

【写真 2】 フェナ虐殺の現場



(2014年7月：筆者撮影)

これらチャモロの追悼行事と米軍とのつながりを見てみると、両者は一見密接に結びついているように思えるし、戦争の記憶を媒介としたグアムとアメリカの結びつきは、しばしば「解放」(“Liberation”)という言説の中で語られることがある。しかし、先述したようなグアムの歴史的背景や社会状況も照らし合わせながら考えてみると、米軍基地問題—チャモロの土地返還や環境破壊の問題等—といった「負の側面」と隣り合わせであることがわかる。グアム・チャモロにとって米軍の存在は、割り切ることのできない「複雑さ」をはらんでおり、戦争の記憶が想起される追悼行事においても「解放」という「ポジティブな」言説だけで両者の結びつきを語ることはできないのである。

### (3) 戦争の記憶をめぐるグアムと日本のつながり

次に、戦争の記憶をめぐるグアムと日本のつながりにも目を向けてみたい。戦時中に犠牲になったチャモロの追悼行事に日本の関係者が参加するようになったのは、ここ十年来のことになる。2004年頃から日本総領事や在グアム日本人有志がチャモロの追悼式に参加するようになり<sup>4)</sup>、2005年や2010年には犠牲になったチャモロの人々に対して日本総領事による謝罪や「お詫び」・同情の気持ちの表明がなされている<sup>5)</sup>。加えて、2011年には総領事がサバイバーを含む追悼式の参加者と式後に懇談する様子も報道されている<sup>6)</sup>。グアム・チャモロと日本との関わりを考える時、どうしても観光面でのつながりに目が行きがちになってしまうが、同島における戦争の記憶を想起する活動に日本側も関わってきているという事実を押さえておく必要がある。アジア・太平洋戦争におけるグアムの戦争被害が日米によるものであることを踏まえれば、一方の当事者である日本の代表(総領事)がグアム・チャモロの追悼行事に参加するようになったということは、やはり意味のあることだといえるだろう<sup>7)</sup>。グアムにおける戦争の惨禍を日本側が「想起」するようになるとともに、グアム側による「赦し」がなされるというように、両者の間で戦争の記憶をめぐる「回路」がつながりつつあるといえる<sup>8)</sup>。

4) *Pacific Daily News*, July 22, 2005, p. 4.

5) *Ibid.*, July 11, 2010, p. 3. “Today, having the opportunity to attend the memorial service and to lay a wreath, I truly express feelings of deep sympathy and sincere apology as a husband, a father and a human being that the people of Guam became (victims)”;

*Ibid.*, July 16, 2005, p. 2. “I want to express my profound condolences and deepest sympathies to all the Chamorro people who lost their lives and to those who survived and experienced physical and mental pain” “I laid the flowers at Tinta and Faha today as an expression of my heartfelt apologies”

6) *Marianas Variety*, July 11, 2011, p. 1.

7) *Pacific Daily News*, July 16, 2005, p. 2. 当時の日本総領事は、日本政府の代表にとって、これら戦時中に命を落としたり、被害を受けた全ての人々に敬意を払う行事に参加することは非常に重要であると述べたという。また、筆者が2014年7月にグアムにおける現地調査で在ハグニャ日本総領事館を訪れた際には、首席領事及び現地の総領事館職員から日本総領事の追悼行事への参加について話を聞くことができた。それによると、2004年頃から日本総領事がチャモロの追悼式に参加するようになった背景には、グアム側からの参加の打診があったという。グアム側が参加を打診した具体的な動機等については、さらに調査を進める必要があるが、同島における戦争の記憶を想起する活動に日本側が参加する大きな契機になったといえる。

8) グアムと日本の中で戦争の記憶をめぐる「回路」をつなげる別の試みとして、南太平洋戦没者慰霊公苑の建設が挙げられる。この公苑の建設については、アメリカの退役軍人や政治家から激しい非難があり、完成が先延ばしになるとともに、当初の予定とは大きく異なるかたちで公苑が建設されることとなった。同公苑の建設につ

ただし、2000年代になるまでこうしたチャモロの追悼式に日本の人々が参加しなかった、あるいはできなかった背景にも目を向けなければならない。もちろん、終戦直後にはグアムに反日的な感情があったことは想像に難くないが<sup>9)</sup>、戦後グアムの観光開発や日本人観光客の増加がある一方で、戦時中に犠牲になったチャモロの追悼式がどのように行われてきたかということも頭の隅に入れておかなければならない。さらに、チャモロのサバイバーたちが「赦すけれども、忘れない」と度々語っていることも考えると、彼ら／彼女らが「忘れない」としていることの中身からも目を背けることはできない。グアムにおける追悼行事の歴史の変遷については、稿を改めて詳述するが、戦後根強く残っていた反日的な感情が観光産業の流入等によりいかなる影響を受けていったのかという点についても注目していきたい。

#### (4) 追悼式の形式

【写真3】 ティンタ・ファハ虐殺の追悼式会場に設置された  
グアム旗と星条旗



(2014年7月：筆者撮影)

もう一つ、戦時中に犠牲になったチャモロの追悼式を見る上で、その形式にも注目しておきたい。これらの追悼式では、いくつかの特徴が見られるが、まず参加者の感覚に訴えてくるのが、グアムとアメリカの結びつきの強さである。この点については米軍との関わ

---

いては、(山口 2007) ; (長島 2010) ; (カマチヨ 2011) 等を参照。

9) *Ibid.*, July 21, 2005, p. 22. 戦前から戦時中にかけてのグアムでは、日系チャモロと呼ばれる人々がいた。父親が日本人、母親がチャモロであったアントニオ・サヤマ (Antonio Sayama) 氏は、兄を日本軍に徴兵され、自身もマネンガン強制収容所で嫌がらせを受けるなど、戦争が始まると苦難の時期を過ごすこととなった。終戦後も2年間は、日本人用の収容所で過ごし、出てきた後はゾーニャ (Yona) に移ったものの、日本人の血筋であることから“Jap”と蔑まれていたという。

りでも触れたが、式典の形式にも明確に表れている。実際に追悼式に足を運んでみると、式典の会場が星条旗を模したデコレーションで飾られていたり、グアム旗と星条旗が並べて設置されていたりしている（【写真3】参照）。加えて式典の中で、合衆国国歌（National Anthem）とグアム賛歌（Guam Hymn）がセットになって歌われることがよくある。まさに、追悼式という戦争の記憶を想起する場で、グアムとアメリカの結びつきが象徴的に表現されているのである。グアムにおいて、戦争の犠牲になった人々が思い起こされる時、そこには必ずと言ってよいほど「アメリカの影」が色濃く投影されている。しかも、表面的には両者の結びつきの強さが表象されているようでありながら、同時に微妙な「ズレ」も見取れることがある。合衆国国歌が歌われる時、軍関係者は一様に敬礼をし、敬意を払う姿勢を取る。だが、直後にグアム賛歌が流れると、その敬礼にばらつきが出てくる。おそらく、こうした「ズレ」の端的な理由は、軍関係者の構成がグアム生まれでないしは縁のある者と島外から来ている者とが混在していることにあると考えられる。「アメリカ合衆国」という国家そのものが多様なバックグラウンドを持つ人々から成り立っているということもあるが、グアムとアメリカという二者関係においては、両者をつなぐ戦争の記憶が「ズレ」を含みこんだまま、「ナショナルなもの」として表象されている。言い換えると、まさに両者の歴史的関係が日本による占領統治とその後の日米戦で犠牲になったチャモロに対する追悼式の場に散りばめられているのである。

また、これらチャモロの追悼式が基本的にはキリスト教（カトリック）の様式に沿って行われている点も見逃せない。追悼式のプログラムにカトリックのミサが組み込まれていたり、式典によっては聖歌・賛美歌の斉唱に加え、聖体拝領（Communion）も実施されたりする。各追悼行事により若干の構成の違いはあるものの、グアム人口の約8割がカトリックであることを考えれば、島の人々の宗教生活に根差したかたちが取られているといえる。追悼式における宗教的要素の存在は、死者の想起について考える上でも重要な位置を占めてくる。追悼行事において、カトリックの形式が取られていることは、グアムの人々にとって戦争による死者を想起するという作用をより強めることにもなっているだろう。

#### **(5) 在グアム日本有志による戦没者慰霊祭**

これまでアジア・太平洋戦争で犠牲になったチャモロの追悼行事について述べてきた。これらの追悼行事では、グアム側のコミュニティや記念財団などが中心になって式典を主催していたが、近年グアム日本有志の中から同島における戦没者慰霊祭を行う動きが見られるようになってきた。この慰霊祭の形式や参加者等に目を向けてみると、明らかにこれまで見てきたチャモロの追悼式とは異なる点が見受けられる。以下、2014年7月に筆者が足を運んだ70th Anniversary The End of the Guam War Peace Memorial Service「グアム島太平洋戦争戦後70年戦没者慰霊祭」（主催：Pacific War Memorial Association Guam「戦争を風化させない会」）よりそれらの違いを簡単に見ていきたい。

まず、この戦没者慰霊祭には、日本から靖国神社の神職が参加しており、簡素な神棚の

前で神式の儀礼に即したかたちで式が進められている（【写真 4】参照）。他にも教会神父による簡単な祈りの言葉が述べられたりもしたが、やはり神式の儀礼を軸とした慰霊祭の進行がなされていると言ってよい。グアム議会の正副議長や地元コミュニティの関係者に加え、戦争の惨禍を生き抜いたサバイバーも少数ながら参加していたものの、チャモロの追悼式と比べると、数自体は少なかった。しかも、注目しておかなければならないのが、グアム側の参加者も神式の作法に則って式に参加していたということである。中には「二礼二拍手一礼」で玉串奉拝礼を行うグアム側参加者もあり、筆者も驚きを隠せなかった。なぜなら、戦時期にグアムを占領統治していた日本は、現地住民に「お辞儀」を強制し、きちんと行わなかった者には身体的な懲罰を加えていたからだ。この「お辞儀」の強制という日本による占領統治期の体験と戦没者慰霊祭における「二礼二拍手一礼」との対比は、慰霊祭という場で戦争の記憶を想起する行為にある種の「危うさ」がはらまれていることを示している。すなわち、「お辞儀」「礼をする」という何気ない所作の中に、過去の「苦難の時期」の記憶を不意に呼び覚ます可能性が秘められているのである。その「危うさ」は慰霊祭の参加者・主催者を問わず、グアムという空間で「苦難の時期」とされる日本占領統治期を「想起」する者全てに降りかかってくる。グアムで「想起」という行為に関わる際には、同島における戦争の「苦難」が持つ意味と自らの「立ち位置」をよくよく吟味する必要があるのである。

【写真 4】 戦没者慰霊祭に参加する靖国神社神職



(2014年7月：筆者撮影)

次に戦没者慰霊祭の参加者に目を移すと、興味深い人物たちがいる。この慰霊祭には、日本からの参加者も多数見られたのだが、その中に平沼赳夫（次世代の党衆議院議員）、



高市早苗（自民党政調会長）、三宅博（次世代の党衆議院議員）という国会議員が三人含まれていたのである<sup>10)</sup>。いずれも「私的訪問」というかたちでの参加だったが、これまでの現地調査で訪れたチャモロの追悼式では、日本の国会議員の参加は見られない。この国会議員らに加え、グアム議会正副議長と主催者である「戦争を風化させない会」のメンバーからスピーチがなされている。

ここで、それぞれの参加者によるスピーチを比較してみると、興味深いことが浮かび上がってくる。それは、日本・グアム双方で、同島における戦争被害の主語が曖昧化されて語られているという点である。確かに現地住民の犠牲者について言及されることはあっても、「誰」によりその犠牲が払われることになったのかという点については、双方で敢えて触れないようにしている感さえある。その上で、観光や文化面での両者の交流について触れ、今後の両者の関係を発展させていく「未来志向」が目指されている点にもグアム・チャモロが辿ってきた歴史の「影」の濃さを看取することができる。今回取り上げた戦没者慰霊祭は、在グアム日本人有志による主催であり、その慰霊祭にチャモロの人々が付き合っている意味というのも考えてみる必要がある。「日本に寄り添うグアム・チャモロ」という構図がこの慰霊祭に表れているといえるが、日本の背後にはアメリカの存在も見え隠れしている。グアム（マリアナ諸島）には、日米による植民地支配や戦争の舞台にされてきたという歴史的背景があり、戦後の日米関係の強化とも相俟って、追悼・慰霊の場における「主体」としてのグアム・チャモロの存在を不可視化するような構造が生み出されているのである。

#### 4. おわりに

追悼行事におけるグアムとアメリカの関係は一見すると、強力なもののように見える。戦時中に犠牲になったチャモロの追悼式時に合衆国国歌・グアム賛歌の歌唱や星条旗・グアム旗の設置が行われていることを振り返れば、このことがよくわかる。両者の「つながり」は鮮やかなまでに象徴的に描かれており、参加者の感覚に訴えかけてくる。しかし、追悼式の場についてよく観察してみると、両者の間に根深く残る植民地主義の歴史が浮き彫りになってくる。チャグイアン虐殺やフェナ虐殺の追悼行事を取り上げながら先述したように、チャモロの追悼行事にアメリカ（軍）の存在が与える影響は大きく、式典の中で表面化することは稀であるとしても、チャモロの人々の心の中にアメリカに対する割り切れない思いがあるということを改めて述べておきたい。

一方で、日本による占領統治やその後の日米戦の中で命を落としたチャモロの追悼式において、日本総領事館関係者や在グアム日本人有志がグアム現地の人々とのつながりを持つ機会を得ているということは、やはり注目しておきたい点である。それは、チャモロのサバイバーたちの追悼式への参加と照らし合わせて考えてみるとよくわかる。つまり、かつ

---

10) 肩書はいずれも戦没者慰霊祭が行われた2014年7月現在のもの。

てグアムを占領統治していた日本にルーツを持つ者たちと当時をよく知るサバイバーたちが同じ空間に集い、戦禍を被ったチャモロを追悼しているという構図が浮かび上がるのである。まだまだ不十分なものであるかもしれないが、一度は埋め立てられ、途切れたと思われていたグアムと日本の間の戦争の記憶をめぐるつながりが回復しつつあるといえるのではないだろうか。

しかし、この戦争の記憶をめぐる「つながり」も決して単純なものではない。最後に上げた戦没者慰霊祭では、在グアム日本人有志の中から式典を挙げる動きが出てきたことが一つの特徴だといえる。慰霊祭の中で語られるのは、グアムにおける戦争で犠牲になった全ての人々（日米両軍の将兵、グアムの現地住民）を慰霊するという姿勢だった。しかし、特に日本からの参加者（国会議員）や主催者のスピーチ内容をよく見てみると、そこには明らかに旧日本軍将兵に対する「慰霊」と「顕彰」が織り交ざった様子を垣間見ることができるのである。

最後に、筆者がこれまで行ってきた調査・研究を踏まえつつ、本稿でも度々言及してきたある表現について、再度触れておきたい。

「赦すけれども、忘れない」

この表現は、グアムにおける戦争の記憶の表象を分析する過程で、必ずと言っていいほど出会うものだ。グアムを含む西太平洋におけるアジア・太平洋戦争の戦闘が終結して70年が経つが、その中でグアムの人々は、現場訪問・追悼式や記念ミサといったかたちで戦争の記憶を想起・継承する営みを紡いできた。「何を忘れない」のかという問いは、グアムにおけるアジア・太平洋戦争の記憶をめぐる三者（グアム・日本・アメリカ）の認識のスタンスを考える上で、非常に重要なものになってくるだろう。「忘れない」が指している出来事が「誰に」よるものなのか、その想起のされ方まで含めて、よく考えなければならぬ。

#### 【謝辞】

本稿は2015年2月28日に名古屋大学東山キャンパスで行われた若手合同研究会「第1回地域文化・政治研究大会」における発表及び2013年1月に一橋大学大学院社会学研究科に提出した修士論文「グアムにおける戦争の記憶と戦後補償のつながり—先住民チャモロの視点を中心に—」を基に加筆修正したものです。研究会や大学でお世話になった関係各位のみなさまに、この場をお借りして感謝いたします。また、一人一人のお名前を挙げることはできませんが、現地調査に際して諸々の助言等をいただいたマリアナ諸島のみなさま方にも心から感謝の意を表します。

【参考資料・文献】

*Pacific Daily News*

July 2005, 2007~2010

*Marianas Variety*

July 2011

荒井信一

2006『歴史和解は可能か—東アジアでの対話を求めて』岩波書店。

キース・L・カマチョ

2011「マリアナ諸島で大戦を記念する日本人」矢口祐人・森茂岳雄・中山京子（編）『真珠湾を語る—歴史・記憶・教育』東京大学出版会、97-119頁。

中野聡

1996「戦後五〇年とフィリピン」『季刊 戦争責任研究』（11）：50-54,75。

2002「フィリピン戦没日本人慰霊の営みと戦争責任の記憶」『季刊 戦争責任研究』（37）：10-17。

2004「追悼の政治—戦没者慰霊をめぐる第二次世界大戦後の日本・フィリピン関係史」池端雪浦・リディア・N・ユー・ホセ（編）『近現代日本・フィリピン関係史』岩波書店、367-408頁。

2005「フィリピンが見た戦後日本—和解と忘却」『思想』（980）：42-56。

2006「日本・フィリピン戦没者追悼問題の過去と現在—「慰霊の平和」とアムネシア」森村敏己（編）『視覚表象と集合的記憶—歴史・現在・戦争』旬報社、289-321頁。

2010「和解と忘却—戦争の記憶と日本・フィリピン関係」足羽與志子・濱谷正晴・吉田裕（編著）『平和と和解の思想をたずねて』大月書店、252-272頁。

2011 a「東南アジア「忘却の共同体」の行方」菅英輝編『東アジアの歴史摩擦と和解可能性—冷戦後の国際秩序と歴史認識をめぐる諸問題』凱風社、294-317頁。

2011 b「二つの戦後六〇年—比米戦争と第二次世界大戦の記憶と哀悼」藤原帰一・永野善子（編著）『アメリカの影のもとで—日本とフィリピン』法政大学出版局、117-153頁。

中山京子・ロナルド T. ラグアニャ

2010『入門 グアム・チャモロの歴史と文化—もうひとつのグアムガイド』明石書店。

長島怜央

2010「グアムにおけるアメリカ政府への戦後補償要求—1970年代～1990年代初頭のパトリオティズムとの関わりを中心に—」『季刊 戦争責任研究』（67）：54-63。

山口誠

2007『グアムと日本人—戦争を埋立てた楽園』岩波新書。

2013「戦争の記憶と観光—グアムに見る戦争観光の三類型」福間良明・野上元・蘭信三・石原俊（編）『戦争社会学の構想—制度・体験・メディア』勉誠出版、367-388頁。

**Camacho, Keith L**

**2011** *Cultures of Commemoration: The Politics of War, Memory, and History in the Mariana Islands*. Honolulu: University of Hawai'i Press

**Carano, Paul & Sanchez, Pedro C.**

**1964** *A Complete History of Guam*. Rutland, Vermont and Tokyo: Charles E. Tuttle Company

**Rogers, Robert F.**

**1995** *Destiny's Landfall: A History of Guam*. Honolulu: University of Hawai'i press

**Sanchez, Pedro C.**

**1988** *Guahan Guam: The History of our Island*. Agana: Sanchez Publishing House